

「小児の消化管内視鏡検査法」

京都第一赤十字病院医長 多田正大 著
京都府立医科大学教授 川井啓市

山口大学教授

竹本忠良

小児に対する消化管内視鏡検査の気運だけは完全に成熟した。それを正しく反映する証拠の1つが、このところ相次いだ小児の消化管内視鏡検査法の本の出版である。いま、私の机上にも、並木正義教授が編集された「小児の消化管内視鏡検査法の実際」(医学図書出版)と、熊澤博久助教授の著書「小児消化管内視鏡検査の実際」(金原出版)とがある。

それに、この書評で取り上げる多田正大博士と川井啓市教授の著書「小児の消化管内視鏡検査法」(医学書院)が加わった。これらの3冊の本を読んで、小児の消化管内視鏡診断学および内視鏡治療学の基本が確立したことがよく理解できる。3冊の本の著者ないし編集者とも、わが国の小児内視鏡検査のパイオニアであり、多年にわたって、この領域の展開に、文字どおり心血を注がれた方々である。

特に、多田正大君は日本の消化器内視鏡学を再び活性化している若手研究者群でも、ひととき際立っている最大の功労者である。多田正大博士は川井門下の俊秀の1人であり、最近の若手研究者でも珍しいほど、幅広い視野を持っている。最も得意な研究テーマは、小児内視鏡検査のほかに、大腸病学、特に大腸内視鏡検査であることはよく知られている。

本書のなかにも、健常大腸粘膜などの拡大大腸ファイバースコープによるpitの視察記録写真、薬剤性大腸炎の内視鏡所見、そのほか下部消化管の記述は、同君が最も得意としたところである。もちろん、大腸だけではなく、上部消化管内視鏡検査の記述も生き生きとしており、消化器内視鏡関係の数多くの本にみない迫力を持ち、この本を読むものに好感と共鳴を迫る生き生きとした文章である。

この本を手にとって、Part 1の小児の内視鏡検査の歴史の項に1972年に経験された7歳児の食道静脈瘤出血のカラー写真が最初に目に飛び込んだとき、本当にびっくりした。この本の編集のあまりに鮮かな手並に、完全に卵を脱いだ次第である。これだけの手腕と知性とは備わっているからこそ、消化器内視鏡のなかでも難物中の難物にとどまっている小児内視鏡検査法を、134頁の本にもの見事にまとめあげることができたのである。

この本1冊で、小児内視鏡検査のすべてを理解することができるし、欧米に比較すると、専門分野としてまだ認知されていない小児消化器病学のあるべき姿を理解させることが有難い。しかも、消化管内視鏡検査が、いま幾つかの変動期を経過して、完全に新しい時代に入った

ことを、簡潔な文章と鮮明なX線と内視鏡の写真でもって指摘している。

川井教授も多田博士も、ともすれば固着化しそうになり、こじんまりとまとまりそうになりがちな環境を常に打ち破ってゆく人である。つまり、「沈滞の固まろうとするのに力のかぎり抗する」(三枝充恵)人である。このような個性だからこそ生むことができた、最近の消化器内視鏡学の歩みのなかで特筆される大きな成果である。そして、この本こそ、最近次第に数多く出版されている消化器病関係の本の間隙をもの見事に衝いたもの、更に埋めたものと言えよう。

アレクサンダー・ミッチャーリヒは「葛藤としての病」(中野良平/白滝貞昭訳、法政大学出版局)に“伝統のうちに根をおろしている社会的に蓄積された経験は、内容的にはまた先入観に満ちたものとも言える”と述べている。臨床医、特に消化器病医は1人でも多く、この本に啓発されて、先入観を捨てて、小児内視鏡検査がここまでたくましく成長し、一部においては既に臨床上不可欠なまでに駆使されていることを、十分に学びとる必要があることを強調しておきたい。

まだまだ消化器内視鏡医でも pediatric endoscopy については、全く知識を持たないものが多過ぎる現状である。このような状況では、もっともっと良い診療を受ける権利のある病児が救われないだろう。

B5判 134頁 図33 写真52
原色図56 1982年
¥8,400 円300

医学書院 刊